法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-06

蕭乾の繰り返された結婚と離婚

岡田, 祥子 / Okada, Sachiko

(出版者 / Publisher)
法政大学言語・文化センター
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
言語と文化 / 言語と文化
(巻 / Volume)
2
(開始ページ / Start Page)
45
(終了ページ / End Page)
71
(発行年 / Year)
2005-01-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002781

Hosei University Repository

蕭乾の繰り返された結婚と離婚

岡　田　祥　子

はじめに

中国では蕭乾（ショウケン）（1910〜99年）は現，当代を代表する才気ある作家の1人といわれ，傑出したジャーナリストと称され，一際優れた翻訳家ともいわれている[1]。筆者が蕭乾の名を初めて知って，彼の作品「栗子」，「籬下」，「郵票」，「倫敦三日記」などを読んだのは，80年代中後期だった。今，『蕭乾研究資料』（筆者注 — 後述する）の巻末の「蕭乾著訳年表」を見ると，彼の著書は80年に『蕭乾散文特写選』（人民文学出版社）が，81年『一本褪色相冊』（百花文芸出版社。三聯書店香港分店），82年『蕭乾短編小説選』（人民文学出版社），82年『蕭乾』（「現代文学作家選集」の1冊。香港三聯書店），84年『蕭乾選集』（四川人民出版社），86年『搬家史』（湖南人民出版社）などが陸続と再版，出版されていたことがわかる。しかし，当時の日本では，作家蕭乾の名を知る人はおそらく極めて少数であったろうから，東京の中国書専門店でも，蕭乾の著書を見つけることは難しかった。

蕭乾の紹介が日本でおそくなった理由を考えると，彼の経歴にその一因はある。57年5月，反右派闘争が始まると，彼は右派の烙印を押された。彼は現夫人文潔若（ブンケツジャク）（1928年〜）と結婚して3年目，46歳だった。以来，79年2月に冤罪が晴らされるまで，延々22年間，蕭乾は全く創作を許されなかった。先の「蕭乾著訳年表」によると，57年6月1日に，彼は『人民日報』に「放心・容認・人事工作」（エッセー）を発表したが，その次の創作は78年8月の「スノーと中国新文学運動 —『リビングチャイナ』」（回想録）である，その間，22年2ヶ月の創作欄は空白になっている。彼が創作を許されなかった期間の作家としての時間の大半は，欧米文学の翻訳に費やされたのだった。それ故，中国においても，彼の名前や著書が読者の目に触れるようになったのは，80年代

Hosei University Repository

に入ってからであった。このような事情から，日本での蕭乾の紹介はおそくなったのである。

たまたま読んだ蕭乾の数編の作品は，筆者がこれまでに読んだ他の作家には感じたことのない言葉にしがたい哀歓があって，以後，筆者にとって蕭乾は忘れ難い作家になった。

90年代に入って，蕭乾の「夢之谷」，「落日」，「一本褪色的相冊」などの長，短編小説や散文なども手軽に読めるようになった。筆者はこれらの作品から彼の生い立ち，家庭環境，経歴など，彼の生き様の全てが，他に類を見ない独特なものであることを知った。

あるとき，筆者が蕭乾に手紙を書き送ったところ，彼からすぐ返事が届いた。以来，彼と数回文通を交わし，95年8月30日，北京市復興門外にある蕭乾宅を訪問した。筆者は蕭乾に初対面から亡くなるまで合計4回会った。彼はいつもニコニコ穏やかで，動作，振る舞いもおっとりしていた。絶えることのない満面の笑みは，生来のものであるようだった。彼の首を右にかしげる仕草は，いかにもユーモラスであどけなく，苦労を知らない純粋，無垢の少年のようだった。作品同様，彼の動作，会話からも直接哀歓が伝わってきて，筆者は興味をそそられ，好奇心をかき立てられたのだった。

筆者は蕭乾が亡くなってからも今日まで，彼の作品を読み，読み返しているが，読むたびごとに新しい発見をし，彼への関心が増し，好奇心が高まるのである。

今，この稿で筆者が書こうとしているのは，蕭乾への幾つかの関心事の一つ，蕭乾の結婚，離婚についてである。

蕭乾は生涯に4回結婚し，3回離婚したということだ。筆者はその経緯を知りたくてこの稿を書いてみようと思い立った。拙文では著書のタイトルは中国語名か，日本語訳名のいずれかを使い，登場する人は初回のときのみ日本語読みのルビを振り，全て敬称を省いて書くことをお断りしておく。

第1章　蕭乾の4人目の妻文潔若と『私と蕭乾』

筆者が蕭乾は4回結婚し，3回離婚したことがあると初めて知ったのは，蕭乾夫妻と初対面のとき，彼の妻文潔若から贈られた彼女の著書『私と蕭乾』を読んだことからだった。

Hosei University Repository

それを知った筆者の驚きは大きかった。それまでに筆者が読んだ蕭乾の作品は，小説であれ，エッセーであれ，彼の実体験に基づいて書かれた内容のものが大半だったが，彼が結婚，離婚を繰り返していたことは，全く書かれていなかったからである。蕭乾の4回目の結婚は，蕭乾44歳，文潔若26歳のときで，文潔若は初めての結婚だった。

文潔若は，中国では作家蕭乾の妻として知られるだけでなく，日本文学の翻訳家としても著名である。また彼女は作家であり，編集者でもある。彼女の著書には『私と蕭乾』（広西教育出版社 92年2月出版）『夢の谷の奇遇』（中国友誼出版公司 92年11月出版），『旅人のオアシス』（江蘇文芸出版社 95年6月出版）などのほかにも多数ある。

以下に文潔若の略歴を紹介し，蕭乾との結婚にいたる過程を紹介する。

文潔若は6歳のとき，外交官だった父親とともに来日し，2年間，東京麻布で暮らした。帰国後，北京市東城区東単にあった日本人学校に通い，日本語を学んだ。清華大学では西洋文学を学んだが，日本語の研鑽にも努めた。出版社入社後もすでに日本語の翻訳家として世に知られていた銭稲孫（セントウソン）（1888～1966年）から日本語のレッスンを受けた。

文潔若は蕭乾と1954年結婚したが，57年，蕭乾が右派とされたため，幸せな結婚生活は3年で終わった。反右派闘争，文化大革命の期間は，夫妻はことごとく卑しめられ，侮られ，艱難辛苦の日々を送った。しかし，蕭乾が79年2月名誉を回復し，創作が許されると，文潔若も人々の肯定と信頼，尊敬を受けるようになった。

彼女は半世紀近く，樋口一葉，小林多喜二，芥川竜之介，徳田秋声，谷崎潤一郎，川端康成，有吉佐和子など，日本人作家の作品を多数翻訳してきた。2000年8月29日（火曜日）の『朝日新聞』夕刊は，「日本外務省は，半世紀に及ぶ文潔若の中国での日本文学紹介の業績を称え表彰した」と彼女の顔写真を付して報じていた。夫蕭乾亡き後も，文潔若は日本文学の翻訳を続ける傍ら，『日本文学研究会』理事として，北京大学，中国社会科学院などで，日本文学を専攻する大学院生たちの論文審査委員長を務めるなど，今も元気に活躍している。

文潔若の著書『私と蕭乾』は，彼女が1950年に精華大学を卒業し，出版社で働き始めたころから書き出され，職場で蕭乾と出会い，結婚をした。2人は反右派闘争，文化大革命の大災禍の中を励まし，励まされながら生き抜いてき

Hosei University Repository

た，その40数年来の困難の日々をありのまま描いた『夫婦史』である。

文潔若は『私と蕭乾』の中で，出版社で働き出したころから，蕭乾と結婚するまでを詳細に書いている。

私は毎日，早朝から弁当を持って出勤した。夜10時まで残業すると，一目散で家に帰った。母と姉の3人で，たまり水のような静かな日々を過ごしていた[2]。

彼が出勤してくる日は，私はすでに出版された訳本や，原書を持っていき，彼に教えを請うた。彼は毎回決まって訳文を読んで，自分の意見を言い，私にも幾つか道理を講じてくれた。彼の話は粋でしゃれていて，若い編集助手に対する彼の根気強さに感動したものだった[3]。

私は彼の学識と才気の虜になった。彼以外に私を引きつける同年代の男性は，私の周囲には1人もいなかった。私は文字に拘わる仕事の上で，1人の指導者を探し当てたばかりか，私を理解してくれる男性を探し当てたのだった[4]。

母がやっとふたりの結婚に同意をしてくれた。しかし障碍はなくなったわけではなかった。私のことを心配してくれる職場の友人たちが，度々「交際をやめなさい」と忠告してくれた。彼女たちは，蕭乾は政治的な問題を抱えている上に，すでに3回も離婚歴があり，おまけに子どもまでいることを持ち出し，「彼は社会的にも心情的にも，信頼の置けない男にちがいない」と断言したのである。彼女たちの忠告は，私の幸せを思ってくれてのことだったから，私はひどく動揺し，3回も彼に絶交状を書いた[5]。

彼は過去の結婚について，正直で，少しも隠し立てしなかった。彼はかつて1人の妻を捨て，2人の妻に捨てられたことを告白してくれた。彼は私に言った，「結婚生活での不安定が他人を傷つけ，自分をも傷つけたのは，人生最大の不幸だった，私は回り道したからこそ，今では賢明で冷静になれる」と。私は彼に言い含められたわけではない。心情的に彼の側を離れられなくなって，結婚を決めたのだった[6]。

18歳という年齢差など幾つかの難関を乗り越えて，私がやっと結婚の意志を固めたとき，蕭乾は私を成渝鉄道（筆者注 — 四川省成都と重慶間の鉄道）竣工までをテーマとする新劇を見に連れて行ってくれた。舞台の上で，男性俳優の1人が両手を挙げて声高に「我々の40年の願望がとうとうかなった！」と言うと，蕭乾は私の手をぎゅっと握って，小声で言った，「私も40

Hosei University Repository

年来の願望がとうとうかなった！　私は自分の家庭を探し当てたのだ!!」と[7]。

蕭乾の父親は彼が生まれる前に亡くなっていた。それ故，彼には誕生以来，家庭はなく，母と2人，亡き父の末弟の家に寄寓する身の上だった。母は独立して息子と2人だけの家庭を持ちたいと懸命に働いた。だが，彼が10歳のとき，過労のため亡くなった。蕭乾は母を亡くした悲しみを小説，散文の中で繰り返し書いている。例えば，

母を亡くした私は，たった1人茫洋たる大海に放り出され，漂泊の人生を歩き始めた。私はどんなに落ちぶれて惨めだったか，たった一つの玩具も，1冊の絵本も買ってもらったこともなく，私に温もりを与えてくれる1人の大人さえいなかった[8]。

蕭乾は14歳で寄寓先の叔父の家から飛び出し，自活の道を歩き出した。母を亡くし，1人になった蕭乾が一層切望したもの，それは落ち着ける暖かい場所（家庭）だった。

蕭乾は小学校5年から高校卒業まで，北京の崇実学校（現北京第二一中学校）で学んだ。1927年1月，崇実青年会が出版して卒業生に贈った『崇実同窓会誌』が現在も母校に残っている。それには蕭乾の卒業後の「永久の連絡先」は「本校」となっている[9]。当時の蕭乾には彼を迎え入れる家庭はなく，学校が唯一落ち着き場所（家庭）だったことが見て取れる。

筆者は『私と蕭乾』によって，文潔若と蕭乾の結婚までの道のりは，年齢差を初め，種々の障害があって，決して平坦なものではなかったが，蕭乾は家庭を持つことを切望していたので，文潔若との結婚を殊の外喜んだことを知ったのだった。しかし，筆者はそれ以外にも，彼女の書から，蕭乾は文潔若と結婚するまでに，すでに3人の女性と結婚し，離婚していたことも知った。蕭乾が文潔若に告白したという「自分はかつて1人の妻を捨て，2人の妻に捨てられた」という件は，筆者の興味をそそる話だった。そこで，筆者は蕭乾の3人の女性たちとの結婚，離婚について，それぞれ何時で，誰を捨て，誰と誰に捨てられたのかを知りたくなって，「蕭乾年譜」を見てみたのだった。

第2章　「蕭乾年譜」

「蕭乾年譜」は，今のところ，魯迅（ロジン）の『魯迅年譜』（王観泉編　黒竜江人民出

Hosei University Repository

版社 79年)，巴金(ハキン)の『巴金年譜』(靳叢林編　吉林函授学院中文系 89年)，老舎(ロウシャ)の『老舎年譜』(甘海嵐編撰 書目文献出版社 89年) などのように，『蕭乾年譜』として独立した一書はない。

「蕭乾年譜」が掲載されている書物を出版年順に挙げてみると，

① 『蕭乾研究資料』(鮑舞(ホウサイ)編 北京十月文芸出版社 88年2月出版)

② 『未帯地図的旅人 — 蕭乾回憶録』(香港『香江出版公司』88年11月出版)

③ 『未帯地図的旅人 — 蕭乾回憶録』(『中国文聯出版公司』 91年9月出版)

④ 『蕭乾選集』四冊五巻本 (傅光明(フコウメイ)編『台湾商務印書館公司』93年5月出版)

⑤ 『蕭乾伝』(李輝(リキ)著『江蘇文芸出版社』93年9月出版)

⑥ 『記蕭乾』(符家欽(フカキン)著『時事出版社』96年5月出版)。

などがある。

① 『蕭乾研究資料』(以下，便宜上①とする) は，本書の導入部として，3〜10頁に「蕭乾略伝」が，10〜32頁に「蕭乾生平年表」が掲載されている。鮑舞は①の後書きで，「蕭乾が収めた多方面の成果，とりわけ小説とルポルタージュ方面の成果は，益々多くの読者と蕭乾研究に携わる多くの専門家の注目を引いている。この本の出版は，彼らになんらかの便宜を提供できるだろう」と述べているように，①は初めての蕭乾文学研究の資料となることを意図して出版されたものである。それ故，「蕭乾生平年表」は，「蕭乾年譜」の最初のものといえる。蕭乾自身も，①の出版には相当に期待と関心を持っていたことが，鮑舞への手紙によってわかる[10]。1982年5月19日の返信は，

私は①は時間を急ぐべきではなく，やはり充実を以ってよしとしたいと考えています。

と書き送り，①が出版を急ぐあまり，粗雑になることを懸念している。82年5月25日の返信では，

私は①は益々時間を急ぐべきではないと思っています (私の出国なんか気にしなくてもいいじゃないですか，私は自己宣伝ための出版物なんか持って行きたくないのです)。この書物は，以後再版されるとは限らないから，私は1984年を目標とすることに賛成します。私は30年来忘れられていた人間ですから，ひと様がすぐに思い出してくれるのを期待できないのです。個人的なものは細々と出版してきましたが，①は総括的な書物に近いのですから，

Hosei University Repository

それには時間をかけるべきです。あなたのご意見は如何ですか？

と，繰り返し，時間をかけて良いものを出版したいとの期待を編者鮑舞に伝えている。

②，③の『未帯地図的旅人 — 蕭乾回憶録』（以下②，③と略す）は同一原稿を香港と大陸の出版社で，時期を異にして出版したものである。②，③の巻末の「蕭乾年譜」は「鮑舞編・文潔若改訂」となっている。その理由は，編集者でもあった蕭乾の妻文潔若が出版に当たって，①の本文に掲載されている「蕭乾生平年表」に自らの手を加え，それを「鮑舞編・文潔若改訂」として掲載したためであろう。

②は『地図を持たない旅人 — ある知識人の選択』という邦題で，丸山昇監修，江上幸子・平石淑子訳で，上巻が92年12月に，下巻が93年2月に，花伝社から出版されているが，この日本語訳本には，原作の巻末に掲載されている「鮑舞編・文潔若改訂」はもとより，如何なる「蕭乾年譜」も掲載されていない。

④『蕭乾選集』（以下④と略す）は第6巻の巻末に，②，③と同じ「鮑舞編・文潔若改訂」を使っている。

⑥『記蕭乾』（以下⑥と略す）の巻末の「蕭乾年譜」は「文潔若編」となっている。これは文潔若が「鮑舞編・文潔若改訂」に更に手を加え，一部削除，書き直し，書き足して，「鮑舞編」の三字を削ったためである。中国現代文学館研究員傅光明の話によると，鮑舞は①出版後，まもなく亡くなったということである。⑥の出版のときは，すでに鮑舞は亡くなっていたので，彼女は鮑舞の名をはずして，「文潔若編」としたものと思われる。

順序が前後したが，⑤『蕭乾伝』（以下⑤と略す）の著者は，本来は『人民日報』文芸部の記者であるが，作家としても，編集者としても，現中国文壇ではその能力が高く評価されている人物である。⑤は最初から最後まで，李輝が全て蕭乾の口述に基づいて書き上げたもので，初めての蕭乾の伝記である。巻末の「蕭乾年譜」は，「蕭乾生平年表」，「鮑舞編・文潔若改訂」，「文潔若編」3種全てを参考にしているが，基本的には，本文同様，蕭乾の口述によって書き上げた李輝独自の文章である。これを「李輝編」とする。

李輝は『蕭乾伝』後書き「繰り返し難きを繰り返す」で，次のように言っている。

蕭乾は彼の一切を書くことに同意した。しかも続けてこう言った，「君が

Hosei University Repository

了解した私を書き，理解した私を書いて欲しい。私は話すべきことを全て話したら，君にどう書かれようとかまわない」と。……途中略……。蕭乾は私が書き上げた原稿に目を通すことを拒み，出版後初めて，私が彼のことをどう書いたのか知ったのだった。

妻文潔若も『私と蕭乾』(「序に代えて」2頁）の中で，蕭乾と李輝とのやり取りを書いている。

「原稿を書き上げると，李輝は一通り目を通して欲しいといってきたよ。」

「それであなたは？」

「私は読まなかったさ，私は彼にこう言ったんだ，『君が私以外の他人のことを書いたのだったら，読んでもかまわないけど，私のことなのだから，読んだら，なんだか検閲でもするみたいじゃないかい』ってね。」

「じゃ，あなたは彼の書いたものに満足しているのね。」

「そうさ，あの若者には苦労をかけた，私と彼とは歳の差もあるし，経歴も違うのに，よくもまああんなにうまく書けたものだよ。」

と。蕭乾の李輝への強い信頼は，終生続き，蕭乾臨終のときも，李輝は彼の枕辺に立ったほどであった。彼らは単に作家，編集者（作家）だけの関係ではなかったのである[11]。

⑥の出版以後，出版，再販された蕭乾の著書で，「蕭乾年譜」を掲載しているものは，全て「文潔若編」を使っている。しかし，98年12月に出版された『蕭乾文集』10巻本（傅光明編『江蘇文芸出版社』）は，蕭乾の90歳の誕生日を祝って，蕭乾文学の集大成だとして出版されたが，それは10巻本でありながら，「蕭乾年譜」を登載していない。その理由を筆者は『蕭乾文集』の編者である傅光明に聞いたところ，「蕭乾文学の集大成といわれながら，『蕭乾全集』とせず，十余万字も削って『蕭乾文集』とした上に，「蕭乾年譜」を登載しなかったのは，出版社と蕭乾側の経済的事情を考慮した結果である」との答えだった。

以上のことから，「蕭乾年譜」は「蕭乾生平年表」，「鮑霽編・文潔若改訂」，「文潔若編」，「李輝編」の4種があることがわかった。

これら4種が，蕭乾の結婚，離婚をどう記載しているのか，見てみたいと思う。

Hosei University Repository

第3章　4種の「蕭乾年譜」は彼の結婚，離婚をどう記載しているのか

蕭乾は自らの私的な生活，結婚，離婚を自らが書くことも，他の作家によって書かれた他の作家の私的な生活を読むことも，ひどく嫌っていたようだ。彼は②の巻頭言で，次のように言っている。

> この回顧録は一側面から書いたものであるから，ひょっとしたら，なにがしかの読者は，李輝の『蕭乾伝』の味わいに及ばないと感じて，ひどく失望するかもしれない。私は自分の感情生活面での困難や不幸を故意にぼかして，ただいい加減に少しばかり書いたにすぎない。一つは現実を考慮してのことである。ある事の関係者あるいはその家族はまだ生きている。私はこれまでに書いたものによって，諍いを起こしたことはないし，今，この齢になって，そうするつもりもない。

と。彼が言っている感情生活面とは，恋愛，結婚，離婚のことであると思われる。当事者や家族に迷惑をかけたくないので，感情生活面については語ってこなかったし，これからも語るつもりもないと言っているのである。蕭乾はまた次のように続ける。

> 二つには私は西洋の伝記文学の素直さは好きだが，誇張しすぎるのはひどく嫌いだ。私はかつて千数頁にも及ぶ『ルソー伝』を読んだことがあるが，元々は彼の晩年の哲学思想及び政治活動を知りたくて読んだのだが，全書が語っていたのは，彼の繰り返された恋愛，結婚と離婚だけだった。私は中国の伝記文学がこの方向に向かっていくのを願わないし，率先して手本を示す気もない。

蕭乾がこの巻頭言を書いたのは，88年5月1日のことである。李輝は蕭乾自らは書きたがらない結婚，離婚について彼から聞き出した件を，⑤の後書き「繰り返し難きを繰り返す」で書いている，93年のことである。

> 私は蕭乾に対する取材を始め，伝記を書く準備を始めたばかりだった。2人は彼の結婚生活に話が及んだ。婚姻は言い古された話題であるのに，多くの中国人はそれに話が及ぶのを恥ずかしがり，作家たちは読者にそれを伝記で読まれるのを ― 特に彼らがまだ生きているうちは，微塵も望まないという伝統を昔から受け継いできているようだ。以前から，私はチラホラと文壇

Hosei University Repository

の先輩諸氏から聴いて，蕭乾の繰り返された結婚，離婚，その間に痴話沙汰も演じられたことも知っていた。私がそれを最初に知ったのは，巴金（1904年〜）の『随想録』を読んでだった。私は取材に失敗するのを恐れた。私が数人の友人たちから知り得たことは，ある作家が伝記を書くことに同意しても，光栄と輝かしい経歴を書くことしか同意してもらえなかったと。だから，私は蕭乾に口ごもりながら，彼の結婚生活について知りたいと申し出たとき，彼の率直さは私をびっくりさせた。彼は包み隠さず（当然，全くごまかさずに話すことはできないだろうが），私に彼の初恋を語り，彼の繰り返された結婚，離婚を語ってくれた。かつて彼が文章にした話もあったが，大部分は初めて彼の口から出た話だった。

李輝は⑤はこれまで蕭乾本人でさえも書かなかった感情面での生活，すなわち恋愛，結婚，離婚についての真実が書かれた伝記であると言っているのである。筆者が見てみたところ，「李輝編」は蕭乾の4回の結婚，3回の離婚を全て記載していた。

蕭乾の初めての結婚は，1936年，蕭乾が26歳のときで，新婦は王樹藏（オウジュゾウ）である。2回目は，1946年，英国で知り合った混血女性謝格温（シャカクオン）である。3回目は，1948年の初春，梅韜（バイトウ）と家庭をつくった。4回目の現夫人文潔若との結婚は，1954年5月であった。「李輝編」によって，蕭乾が結婚した年と全ての女性の姓名がわかった。

「李輝編」に基づいて，他の3種の「蕭乾年譜」で蕭乾の結婚した年を見てみよう。

先ず，「蕭乾生平年表」は，36年，46年，48年の蕭乾の3回の結婚は全て書かれていないが，4回目の文潔若との結婚だけは，比較的長い文章で，54年の項に，

> 5月1日，文潔若と結婚する，ついに彼という結婚面で「あらゆる苦しみを嘗め尽くした」人は，「落ち着き場所を探し当てた」。

と記している。

蕭乾は，82年8月14日送られた鮑舜への返信で，「蕭乾生平年表」の記載に間違いと見落としが計5ヶ所あることを指摘し，書き直し，書き加えるよう要求している。しかし，自らの3回の結婚，離婚に関しての記載漏れがあることに触れなかったのは，前述した②の前書きから推察するに，触れないことが蕭乾の要望であり，鮑舜にも前もって了解させていたからであろうか。

Hosei University Repository

「鮑霽編・文潔若改訂」と「文潔若編」は，元が同じだから当然だが，「蕭乾生平年表」同様，1回から3回目までの結婚には一切触れず，4回目の文潔若との結婚のみを簡単に，54年の項に，「5月，文潔若と結婚する」とだけを記している。

以上のことから，「李輝編」だけが蕭乾の4回の結婚を全て記し，「蕭乾生平年表」，「鮑霽編・文潔若改訂」と「文潔若編」の3種は，4回目の文潔若との結婚のみを記していることがわかった。それ故，これら3種の「蕭乾年譜」を見ただけでは，蕭乾の結婚は生涯たった一度だったということになる。

しかし，①の「蕭乾略伝」は最初の妻のことを5頁に書いている。1935年7月に，

「一二・九運動」[12]が起きた翌日，天津から北京に行き，負傷した愛国学生を見舞った。

とある。また「蕭乾生平年表」の37年の項に，

8月13日，日本の侵略機が上海河北を爆撃した。『大公報』[13]は14版からいきなり4版に縮刷された。新聞社はこれによって，大量の社員を解雇した。蕭乾も失業したので，“小樹葉（ショウジュヨウ）”（「私はこの人に対して，いつも負い目を感じている同志である」）を伴って，上海を離れ，武漢に赴き，やっとのことで，教師の職を探し当てたが，まだ赴任もしないうちに，そこが陥落してしまったので，2人は武漢から長砂に行き，湖南，貴州を経て昆明までたどり着いた。ほどなく，再び『大公報』の社長の招聘を得て，昆明で継続して『文芸』を編むことになった。

愛国学生と“小樹葉”とは，1回目の妻王樹藏の結婚前と結婚後のことである。蕭乾は王樹藏との初対面のときの印象を，「風の中にひらひらと舞う小さな木の葉のような感じだった」と表現し，彼自らは王樹藏と交際中から結婚後も小樹葉と呼び，蕭乾の周りにいる人にもそう呼ばせていた。また蕭乾は王樹藏を実名で書くことはなく，いつも“小樹葉”とダブルクォーテーション付きで書いた。傅光明の話によると，蕭乾は最初の妻をいとおしく思う気持ちが強かったので，小樹葉をダブルクォーテーション付きで書いたということである。以下拙稿では，便宜上“　”を取って小樹葉と書くことにする。

「鮑霽編・文潔若改訂」は，1937年の項は，

8月13日，日本の侵略機が上海河北を爆撃した。『大公報』は紙面を縮刷し，大量の社員を解雇した。蕭乾も失業したので，上海から武漢に赴いた。

Hosei University Repository

ちょうど楊振声（1890～1956年），沈従文（1902～88年）が北京から武漢に来たので，一緒に湖南，貴州を経て昆明に行った。ほどなく，再び『大公報』の招聘を得て，昆明で継続して『文芸』を編んだ。

と記しているが，「“小樹葉”（私はこの人に対して，いつも負い目を感じている同志である）を伴って」の部分が削除されているだけでなく，蕭乾が武漢から昆明まで同行したのは，小樹葉ではなくて，楊振声と沈従文になっている。

また「文潔若編」は

8月13日以後，一時『大公報』を解雇され，転々として昆明に行き，遥か武漢版『文芸』を編集する。

とだけあり，小樹葉のことに触れないのはもちろんだが，「鮑霽編・文潔若改訂」とも異なる文意になっている。以後，これら3種は小樹葉のことに触れる文章は一切ない。

「李輝編」は「鮑霽編・文潔若改訂」と全く同じ文面で，小樹葉を伴っていたことは書いてない。蕭乾が結婚1年後に小樹葉と上海を離れ，武漢から昆明まで行って，そこで生活したことを記載しているは，『蕭乾生平年表」だけであることがわかった。

しかし「李輝編」は最初の妻小樹葉については，結婚の事実だけでなく，2人の夫婦関係が破綻に向かっていく様子も記録している。1939年の項に，

初夏，彼は雲南省から香港に戻ると，ロンドン大学東方学院から，講師として来てほしいとの招請状を受け取った。その間に王樹藏と仲違いして，離婚したいと思ったが，未だ成らず。遂に9月1日，1人で香港を離れ，ヨーロッパに行き，7年間の海外生活を送ることになった。最初は当方学院中国語学部の講師をする一方，『大公報』の駐英特派員も兼任した。

蕭乾は1939年に仲違いをしたまま，妻小樹葉を故国に置いて単身でロンドンに旅立ったが，これが結果として2人の離婚となった。また「李輝編」は1945年の項に，

6月6日，取材先の米国からロンドンに帰ってきて，王樹藏がすでに別の男性と家庭を築いていたことを知った。

とあるが，これは李輝の記載間違いである，⑤の本文では1943年年末のことであるしている，43年年末であるのは確かで，②でもそれがわかる[14]。②は1943年年末に，蕭乾は『大公報』の社長胡霖の訪英を書いている，

ちょうど私が修士論文を書いていたとき（筆者注 ― このとき，蕭乾は東

Hosei University Repository

方学院の講師を辞職し，『大公報』の駐英特派員も辞めて，ケンブリッジ大学キングスカレッジの研究生となっていた)，重慶から友好訪英団が派遣されてきた。一団の中に王士傑(オウシケツ)，王雲五(オウウンゴ)のような政客がいたし，温源寧(オンゲンネイ)のような学者やジャーナリスト胡霖 ―『大公報』の社長もいた。この団体の到来が私を十字路に立たせるとは夢にも思わなかった。私は学者となるのか，再び旧業に戻って新聞記者となるのかの選択に迫られたのだった。

と書き，蕭乾は社長胡霖に説得され，ケンブリッジを辞め，再び記者になる道を選択し，第二次世界大戦の戦場に出て行くことになったのだが，②は小樹葉のことには一切触れていない。

⑤では，胡霖の43年年末の訪英のとき，蕭乾は妻の結婚を知らされたのである[15]。

胡霖は蕭乾の顔色から，訪英後も心理的な葛藤で，大きな苦痛を味わってきたと見て取った，胡霖はどう話を切り出してよいのかわからなかった。だが蕭乾の様子をうかがいながら，彼は穏やかに，慰めるように言った。

「私は君にある事を話すけど，あまり悲しんではいけないよ」

「なんの事ですか」胡霖の表情と態度を見て，蕭乾は即座に訊ねた。

「君は聞きたいかね。彼女は結婚したよ」

「彼女が結婚した？」

蕭乾は怖くて自分の耳を信じることができなかった。胡霖も誰であると言い出さなかったが，蕭乾はすでに小樹葉のことだとわかっていた。彼はまた追っかけて質問を続けた。胡霖は言った，彼が中国を発つ前，楊振声から聞いたことを。「小樹葉は2年前，延安に行き，そこで結婚した。すでに子どもも1人いるそうだ」と。突然この消息を聞いて，蕭乾はなにかの感情はあったが言葉にならなかった。

彼はただ呆然とそこに坐っているだけで，長い間なにも言えなかった。泣きたかったのか，それとも笑いたかったのか？　ひょっとしたらそのどちらでもなかったかもしれない。彼の心を何年か押し付けていた重石がとうとうこのとき，運び去られたのだった。

彼は自分はなにかを失ったのだと感じた。数年来，初めてこのように恋々と小樹葉と一緒にいる情景が思い浮かんだのだった。永遠に彼女に会えなくなったのだ！　彼は悲哀を感じた。これに次いできたのは困惑だった。小樹葉の挙動はなんと理解しがたいことか，彼女の電報，彼女の再婚，彼女の性

Hosei University Repository

格はなんと一貫性がないのだろうか！　しかし，彼女はこうしてしまったのだ。

1939年の蕭乾と王樹藏との仲たがい，43年の蕭乾が，王樹藏がすでに結婚していた事実を知った経緯は，「蕭乾生平年表」，「鮑霽編・文潔若改訂」，「文潔若編」はともに一切触れていない。

前述したが，3種の「蕭乾年譜」は，蕭乾と2回目の妻謝格温との結婚にも触れていないが，彼女との離婚については，「蕭乾生平年表」，「鮑霽編・文潔若改訂」は，1947年の項に，次のように書いている。「蕭乾生平年表」は，

秋，悪人に家庭を破壊され，精神的に深刻な打撃を受けたので，急遽上海を離れたが，再出国を望んでいたのではなく，国内で他に住まいを探し，銭昌照（センショウショウ），関景超（カンケイチョウ）等民主人士が北京で成立させようとしていた中国社会経済学会に参加するつもりだったのだ。

と。「鮑霽編・文潔若改訂」は，

秋，悪人に家庭を破壊され，精神的に深刻な打撃を受けた。

とあるだけだが，2種の「蕭乾年譜」が言っている悪人とは，妻謝格温のことである。

「文潔若編」は1946年から48年に飛び，47年秋，謝格温が家庭を壊したこと（謝格温と離婚したこと）は記載していない。

「李輝編」では，二度目の妻謝格温との離婚については，1947年の項に，

秋，格温との離婚によって精神的に深刻な打撃を受けた。

とし，李輝は「蕭乾生平年表」，「鮑霽編・文潔若改訂」のように「悪人」とはせず，そのまま格温と実名を挙げている。

謝格温との離婚後の蕭乾の落胆ぶりを，「蕭乾生平年表」と「鮑霽編・文潔若改訂」，「文潔若編」は同一の文章で，離婚の翌年48年の項に，

3月，蕭乾は復旦の地下党学生の勧告を受け入れて，『新路』の編集にかかわることを固く辞退した。当時，蕭乾は家庭生活から受けた大きな痛手と苦痛以外にも，思想的にも矛盾と苦悶があったからである。

と書き，蕭乾が2番目の妻格温との離婚から1年経っても，まだ立ち直っていなかったことを記載している。

これについては，『新文学資料』[16] 主編宛の86年11月29日付の手紙で，蕭乾自らも，当時『新路』の編集に携わることを断った理由として，「1947年11月，私は家庭が人に破壊されたので，急遽上海を離れた」と書き送っている。

Hosei University Repository

「李輝編」では，1948年は，謝格温との離婚後の蕭乾の思想的混乱と苦悶の記録は見当たらないが，48年初春，3番目の妻梅韜と結婚したことを書いている。

以上のことから，「李輝編」以外の3種の「蕭乾年譜」は2番目の妻謝格温を，蕭乾を苦しめる悪人に仕立て上げていることがわかった。すなわち，鮑霽，文潔若の両人は謝格温に対してよい感情を持っていなかったようである。

「蕭乾生平年表」と「鮑霽編・文潔若改訂」は1949年の項に，3番目の妻梅韜のことを次のように記す。

> 8月，家族と『華安号』に乗って，某地下党員等の忠告に従って香港を離れ，青島を経て北上し，解放区に急遽赴き，開国大典前夜に北京に到着し，すぐさま国際新聞局の設立準備に参加した。

家族となっているのは，「李輝編」によって，前年48年初春，結婚した3番目の妻梅韜（筆者注 ― 家族となっているのは，このとき，梅韜は2番目の妻謝格温の産んだ長男鉄柱を連れていたため）のことだとわかる。「文潔若編」は，

> 8月，『華安号』に乗って北京に帰る。

となっているだけで，「家族」は削られている。

「李輝編」は「蕭乾生平年表」，「鮑霽編・文潔若改訂」とほぼ同じ文面である。

「李輝編」は，3回目の梅韜との結婚が48年初春であると記載しているのに，「蕭乾生平年表」，「鮑霽編・文潔若改訂」，「文潔若編」は，48年3月は，「この頃，家庭生活から受けた大きな痛手と苦痛以外にも，思想的にも矛盾と苦悶があった」と，蕭乾は離婚の後遺症から完全に立ち直っていないと記載しているのは矛盾する内容であるが，傅光明の話では，蕭乾は48年初春の梅韜との結婚は間違いないと言っていた。

続いて「李輝編」は，1953年3月の項に，

> 梅韜と離婚する。

としているが，李輝は3番目の妻梅韜のことは，『蕭乾伝』本文中でもほとんど触れていない。筆者はこの件を李輝にメールで問い合わせたが，彼からは「私は梅韜については，蕭乾から，あまり詳しく聞いていない」との返事だった。蕭乾は李輝に全てを話すとしながらも，梅韜のことを話さなかったのは，蕭乾には梅韜を公にしたくない事情があったものと思われる。

Hosei University Repository

「文潔若編」の蕭乾の結婚生活についての記載は，前述した1954年5月1日の編者自らの結婚の記載を除くと，「1947年，悪人によって家庭が破壊された，…以下省略…」と，「48年，家庭生活から受けた大きな打撃と苦痛以外に，…以下省略…」だけである。⑥以後に出版された蕭乾の著作集は，筆者が見たところ，「蕭乾年譜」は全て「文潔若編」を使用している。今，見てきたように，「文潔若編」は，蕭乾の繰り返された結婚，離婚を正確に記録していなかった。すなわち，今後も蕭乾の著書に「文潔若編」が使われるなら，時間の経過とともに，蕭乾の結婚，離婚の実態は正確には伝わらなくなり，4番目の妻文潔若との結婚だけが，後世に残ることになってしまうのではないだろうか。

ここで蕭乾の3回の結婚，離婚を整理しておく。1回目の王樹藏との結婚は36年，離婚は39年である。2回目の謝格温との結婚は46年，離婚は47年。3回目の梅韜は結婚48年で，離婚は53年である。蕭乾の結婚は3回とも極めて短期間で終っていることがわかった。

蕭乾が文潔若に告白した「私は1人の妻を捨て，2人の妻に捨てられた」という話は，以上から，蕭乾が捨てたのは最初の妻王樹藏であり，蕭乾が捨てられたのは，謝格温だとわかったが，梅韜にも捨てられたのかどうかは，今までのところでは断定できない。これは後述することにする。

第4章　蕭乾の最初の妻王樹藏

生まれる前に父を亡くし，10歳で母も失った蕭乾を，学校帰りに我が家に連れ帰ってくれたのは，崇実小学校の同級生謝為楫（シャイシュウ），作家謝冰心（シャヒョウシン）（1900〜99年）の3番目の弟だった[17]。そのときから，蕭乾は謝家に入り浸るようになった。そこで，蕭乾は今まで一度も経験したことのない家庭の温もりを味わったのだった。彼は晩年になって，最初の妻となった王樹藏との結婚を決めたときのことを李輝に⑤の中で語っている[18]。

> 家庭の温もりなど味わったことのない孤児の私が，艱難辛苦の挙句，終に生活を維持できる職業を持ち，十二分とはいえないけれど，安定した収入も得るようになった。私は早く家庭を持ちたかった。私は小学生のころ，幸福で安らぎのある生活を羨み，熟知した作家の幸せで円満な家庭を羨んだが，実は，私はそんな家庭を持ちたいと思っていたのだった。

蕭乾が李輝に話した「熟知した作家」とは，いうまでもなく謝冰心である。

Hosei University Repository

蕭乾が小学5年生にして，生まれて初めて見た謝家は，彼の理想の家庭になったのであった。

蕭乾は燕京大学の学生であった1933年冬，沈従文が編集をしていた『大公報・文芸』に短編小説「蚕」を発表し，作家としてデビューした。以後，沈従文の勧めで，彼は文章を次々書いて『大公報』に掲載するようになった。そして大学を卒業すると，35年7月から，天津にあったその『大公報』で働き出した。

以下に書いた蕭乾の王樹藏との出会いから別れまでは，蕭乾が李輝に語ったものである。

私が王樹藏を知るきっかけは，『大公報』に入社した年の秋，『大公報』の社長の命で，画家の張望雲（チョウボウウン）と山東省西部（魯西）を襲った大水害の取材に行ったことからだった。

私は張望雲とは初対面だった。取材の行き返りの汽車の中で，2人はそれぞれの身の上を語り合った。彼は言った，「私は河北省の出身で，絵を学びたかったが，家が貧しく，学校にいけなかった。そんなとき，私は郷里の名士王西渠（オウサイキョ）に出会った。彼は私に学費を援助してくれた。そのおかげで現在の私があるのです。」取材を終えて天津駅に着くと，ホームに張望雲を待っていた若い女性がいた。彼女は王西渠の娘で，王樹藏と言った。私は王樹藏の初対面の印象を，「軽やかにひらひらと静かに自分の身近に舞い落ちてきた木の葉のような人」だと思い，以後，小樹葉と呼んだ。張望雲は私に小樹葉のことを話してくれた。「彼女は生後まもなく母親に死なれ，乳母が養育しました。2年前，彼女の父親，王西渠は後妻を迎えたが，継母と彼女はほぼ同じ年齢だったことから，父娘関係は冷え込み，家庭は彼女には息が詰まるところとなった。彼女は家庭を離れ，勉強して，自活の道を歩みたいと願って，今，北京の女子中学で勉強していますが，ひとりぼっちで，とてもかわいそうな娘です。」

小樹葉は中肉中背，美人ではなかったが，おっとりとして，瞳は澄んで，気立てはやさしく，どこか少女のような恥じらいを持った人だった。無頓着な着こなし，言葉使いもよく，質素だがとても垢抜けていた。

私は彼女に深い憐憫の情を抱いた。2人は頻繁に会うようになった。私は1週間おきに北京に行った，一つは仕事のため，一つは小樹葉に会うためだった。私は彼女を連れて恩師スノー，楊振声，沈従文の家にも出入りした。み

Hosei University Repository

んなはたちまち彼女に好感を持った。私は彼女と一緒にいると，別の女性からは得たことのない暖かさを感じた，だからいつも彼女と一緒にいたいと思うようになった。『大公報』で働き出して，私は漠然とした願望が形成されつつあることを感じていた。家庭を持ちたいのだ，と。

36年春，私は『大公報』上海版準備の仕事に参加し，そのまま上海で働くことになった。私の活躍の場もいっそう拡大された。8月，私と小樹葉は南京に行って結婚した。

私は家を持ったのだ。十数年，人間界を放浪した孤児が艱難辛苦を嘗め尽くし，やっと家庭を持ったのだ。私は安らかで快適な家庭生活を送ることを渇望し，想像した，一匹の野生の馬が家庭に縛られて，規則的な生活をしたがっていることを。

小樹葉も幸運にも才気ある，能力ある伴侶を探し当てたことを喜んでくれた。しかし，彼女は今すぐには単調な家庭生活を送りたくはなかった。自分は若いのだし，勉強がしたいと言った。

私は心底思った，小樹葉は見かけは弱そうだが芯は強い娘なのだ，と。小樹葉は「勉強を続けたい，できれば日本語の勉強をしたい」と言った。私は望まなかった。私にとって結婚とは，新しい生活を始めることだった。独り身の寂しく冷たい生活には，もう耐えられなかった。だが勉強したがっている彼女を見ると，私には彼女の手足を押さえつけることなどできなかった。私は亭主関白ではなかったから。卑しい身の上，挫折の経験が，早くから自由を渇望し，平等を尊重する観念を形成させていたのだ。中国の伝統的な家庭観が私にもあったが，成長するにつれ，それらは消失してしまっていた。

結婚して数ヵ月後，小樹葉は日本行きの客船に乗っていた。私はぼんやりと波止場に立って，遠くなっていく妻の姿を見送っていた。私はまた1人になったと思った。

7月7日，盧溝橋で鳴った一発の銃声が，全民衆に日中戦争の幕開けを知らせた[19]。私は戦地記者として，その前線で取材していた。私が盧溝橋から上海に戻ると，まもなく日本侵略軍の銃声を聞いた。八・一三[20]が勃発したのだった。全上海住民は戦争の砲火の中に巻き込まれた。私は緊張しながら仕事をしていたが，小樹葉の安全だけは大いに気がかりだった。

上海に戻ると，私は1日3回も彼女に電報を打った。やっと彼女は上海に戻ってきた。

Hosei University Repository

私はすぐに小樹葉を宿舎に迎え入れ，しげしげと1年間別れ別れになっていた新妻を見つめた。話したいことはいっぱいあったが，私は慌しく取材のため，彼女の元を離れ，戦場に向かった。

私は『大公報』の胡霖社長に首を宣告された。私は小樹葉と共に上海を離れた，途中絶え間なく砲弾が私たちの頭上を飛び交った。2人は甲板の片隅で小さくなっていた。香港から広州を経由して，武漢にたどり着いた。

昆明に逃れた私は，『大公報』の社長の命で，『文芸』を編集することになった。このとき，小樹葉はすでに西南聯合大学[21]に入学していた。

友人が新四軍に行くのを見送ってから，私は小樹葉と延安に行くことを真剣に話し合っていた。胡霖社長の香港の『大公報』で働くようにとの電報は，ちょうどこんなとき届いた。私の喜びようは，小樹葉の機嫌をひどく損ねてしまったが，私はその喜びをどうしても抑えることはできなかった。

小樹葉はそのまま昆明に残って，西南聯合大学で勉学を続けることになった。ちょうど昆明には，沈従文，楊振声，林徽因（リンキイン）（1905～55年）夫妻もいたので，私は妻を彼らに託して香港へ発ったのだった。

私がクイーンズ通りにある新聞社に入っていくと，古い同僚たちの姿も見えたが，正に別世界の感があった。香港の大通りを歩いていても，気持はずいぶん違っていた，1年前，小樹葉と通りかかったときは，境遇も心境も家を失った犬のようだった。今，職を得て自信を回復すると，精神状態は大きく様変わりしていた。

私は香港に着任してから，ある人の紹介で，以前，北京大学で教鞭を執っていたスイス人教授の家で，彼に中国語を教え，私も彼からフランス語を習うことになった。そこで，私は教授の養女，ピアニストの雪妮（セツジ）と知り合い，瞬く間に恋に落ちてしまった。私は雪妮から今まで味わったことのない興奮と幸せを味わった。彼女は小樹葉とは素養も性格も違う女性だった。彼女の性格や容貌から芸術的興味までが，たちまち私を虜にしてしまい，私にせき止められない衝動を生じさせたのだった。

雪妮は突然私に求愛してきた。私は混沌とした泥酔状態から目覚めた。私は頭を振って宿舎に逃げ帰った。

私はなんとかして雪妮を忘れようとしたが，出張から香港に戻って雪妮に会うと，その決心が崩れた。私にとって，今や雪妮は小樹葉より大切な女性になってしまっていた。

Hosei University Repository

私は昆明に行って，小樹葉に会い，離婚を切り出そうと決心した。

私は彼女に会ってもなかなか本題に入れなかった。やっとのことで，私は香港で1人の娘と知り合いになったと切り出すと，彼女は「そう，いいひとなの？」と聞いた。彼女の心には，私が彼女と離婚したがっているなんて疑念は少しもなかったのだった。

小樹葉にも少しずつ私の言わんとすることがわかってきた。彼女は私の申し出に同意した。沈従文，楊振声は私の離婚に批判的だった。沈従文は元来大声を出す人ではなかったが，大声で私を怒鳴った。楊振声も小樹葉はかわいいし，善良で忠実なよい娘で，今どき得難い娘だと言った。2人は古きを嫌って，新しきを好む私を怒り，この考えを撤回するようつめ寄った。しかし，2人の説得は私を少しも動揺させなかった。

私は小樹葉の同意を得ると，急いで香港に戻った。私が持ち帰った朗報は，結婚を焦っていた雪妮を喜ばせた。私は離婚届を昆明の小樹葉に送った。彼女は離婚同意書をなかなか送り返してこなかった。やっと待ちに待った返事が来た。それは同意書ではなく，電報だった。それはたった四文字，「堅決不離」（筆者注 — 断固として離婚はしません）だった。私の離婚，結婚は暗礁に乗り上げたのだった。

私は39年，ロンドン大学東方学院から一通の手紙を受け取った。この学院に中国語講師が空席になっているので，私に来てほしいというものだった。推薦者はかつて崇実学校で教えを受けたことのある于道泉（ウドウセン）で，彼はチベット文学研究者として英国に留学し，ロンドンで『大公報』を愛読していて，教え子だった私が『大公報』で働いていることを知ってのことだった。

中国語講師招請の条件はよくなく，赴任費用は自前でということだったので，私は躊躇した。『大公報』の社長胡霖が私1人の費用だけは肩代わりしてくれることになり，その代わり，私は当方学院で講師をする傍ら，「『大公報』の駐英記者も兼ねることになった。1939年9月，私は1人でロンドンに到着した。

英国に来て以来，私は昆明にいる小樹葉に離婚催促の手紙を書いたが，ずっと返事は来なかったので，雪妮にも連絡できない，気持ちは中途半端で落ち着かなかった。しかし，仕事の上では充実していた，当方学院での教職を任期まで勤めた後，私は42年秋から，ケンブリッジ大学キングスカレッジで研究生となった。

Hosei University Repository

翌年43年年末，『大公報』の社長が訪英して，蕭乾に伝えた小樹葉の消息は，筆者はすでに前述したので，ここでは省略する。

私は「小樹葉」の再婚を知ると，すぐ雪妮を思った。雪妮ももう別の男性と結婚しているのだろうか。彼女はあてもなく自分を10年も20年も待っていてくれるだろうか。いや，待っていてくれるはずはないと。

私は46年3月，7年振りに帰国した。帰国する前に，私はスイスのジュネーブに行った。人づてに雪妮がジュネーブに来て暮らしていると聞いたからである，会うことはかなわなくても，彼女の住んでいる家だけでも，遠くから見て帰国したかった。彼女の家の前で，私はばったり雪妮の養父スイス人の北京大学元教授に会った。教授が言うには，雪妮は今，夫とイタリアに行っているということだった，彼は私を雪妮の部屋に招き入れてくれた。部屋の書架には，かつて私が彼女に贈った私の著書『栗子』があった。私は雪妮の結婚の現実を見せ付けられ，思ったのだった。私にはすでに謝格温しかいないのだと。謝格温と結婚しようと。

蕭乾は人生の晩年になっても小樹葉だけは忘れられなかったようである。蕭乾は78年1月10日の巴金の弟，李済生（リサイセイ）（1917年～）（筆者注 — 巴金の弟，上海文化生活出版社の会社運営と編集，平明出版社の編集者も兼ねていた）に宛てた手紙で，彼は『ペール・ギュント』の主人公，ペール・ギュントに自分を重ね，小樹葉を，ペールを終生待ち続けた恋人ソルベイグ[22]に見立てていた節がある。

私はイプセンの『ペール・ギュント』を翻訳している。私は王樹藏の身の上から私のソルベイグを失ったのだと。

と，また蕭乾は80年3月9日の李済生への手紙にも，王樹藏のことを書いている。

3月7日の手紙を読んで了解しました。巴金兄が書かれたあの文章『火』は，とっくに拝読しましたが，文潔若と彼女の姉までが，それは私のことを書いているのだと推察しています。彼が責めるのは正しいです。私は②の中で，すでに公然と彼女に謝罪しました。ただ残念なことに，彼女の東北の住所を知りません。もし巴金兄が知っていらっしゃったら，教えてください。私は彼女に『散文特写集』を1冊送りたいのです。

再び，蕭乾の話に戻る。

私は翻訳をしながら，文革のことを深く考え，自分の結婚愛情生活を深く

Hosei University Repository

考えていると，小樹葉のことに思い至るのだ。あんなにも軽率に彼女を捨ててしまい，善良な娘心を傷つけてしまった。若い私が重視したのは容貌，外見の魅力だった。私が必要だったのは，自分の虚栄心を満足させることだった。私は気の向くままに選択したわけではなかったが，結局雪妮を心底愛してしまった。しかし，私が得た報復は私は幸福にもなれず，苦痛の味を嘗め尽くしたことだった。私が最初の妻に負わせた傷は，晩年に入った私の心に咎を感じさせないでいられようか，慙愧の念を抱かせないでいられようか。小樹葉は今どこにいるのだ，まだ生きているのか，彼女は私の懺悔を受け入れてくれるだろうか。私は懺悔しなければならない，もし彼女がすでに亡くなっているのなら，私は彼女の霊前に跪き，線香を焚き，揺らめく紫煙の中で，私によって傷つけられた彼女の魂を慰めたい。

以上が，蕭乾が王樹蔵と知り合って以来，半世紀近くの2人の関係である。

第5章　2人目の妻謝格温

蕭乾はロンドン大学東方学院の講師の3年の任期を終えると，『大公報』の駐英特派員の職も辞して，42年夏，ケンブリッジ大学キングスカレッジの研究生となった。43年年末，ロンドンを訪れた『大公報』の社長の要請を受け入れて，蕭乾はケンブリッジでの研究生活をやめ，従軍記者となって第二次世界大戦の戦場に出かけて行き，刻々変わる戦争の状況を故国に書き送ったのである。そんな蕭乾の心を慰めてくれたのは謝格温だった。蕭乾は謝格温と44年の冬知り合った。

蕭乾の話を続けよう。

美しい娘が事務所に入ってきた。彼女は花束を手に持って，うれしそうに私に差し出し「おめでとうございます！」（筆者注 ― 日中戦争で中国が勝利したこと）と言った。私は彼女をチラッと見ると，彼女は上気して幸せそうな表情をしていた。私は感激して花束を受け取り，それをデスクの上の花瓶に活けた。

謝格温は23，4歳で，オックスフォード大学を卒業していた。彼女の父は中国人，母は英国人だった。彼女は上海で生まれ，1歳のとき英国に来て，ロンドンで育った。彼女は少しも中国語は話せなかったので，彼女にとって，中国は神秘的なところだった。彼女は私と知り合いになると，しょっちゅう

Hosei University Repository

私のところに来るようになり，私に中国語を教えて欲しいと言った，私は彼女に中国語を教える傍ら，中国を語り，故宮の壮大さ，壮麗さを，杭州西湖の美しい景色を語って聞かせた……私が情感たっぷりに語る愛すべき祖国の情景は，彼女の心をロマンチックに詩情豊かにしたようだった。謝格温は私と気の合う友だちになった。彼女は徐々に私に好意を抱くようになり，私を愛するようになった。私はすでに小樹葉も結婚したことを知り，雪妮の消息も知ったので，少しずつ彼女の愛を受け入れるようになっていった。

1946年3月，7年の英国生活に別れを告げ，私は中国行きの貨物船に乗っていた。謝格温は，私に先立ってアメリカミネアポリスに行き，そこで生みの父親に会い，そこから直接上海に来ることになっていた。

彼女はすでに私との結婚を決めて，中国に来て生活していた。ロンドンでの謝格温との出会いは，私に情感の上での安らぎを与えてくれた。私は今回の彼女との結婚が，安定した調和をもたらしてくれるであろうと希望を託していた。

また上海に雨季が訪れた。生まれて間もない子どもは，休むことなく泣き叫び，私の心を逆なでした。子どもは誕生すべきでない戦争，恐怖，インフレのときに生まれた。混乱の日々，私は気持ちが滅入った。

蕭乾は文潔若と結婚するまでに3人の女性と結婚したが，この謝格温だけが蕭乾の子ども，男児（筆者注 ― 蕭馳（ショウチ），幼名は鉄柱（テッチュウ））を出産した。

李輝の『蕭乾 ― 漂泊者は路上に在り』の中に謝格温の写真が計五枚掲載されているが，写真で見る謝格温は小柄だが，日本映画の往年の大女優のひとりを髣髴とさせるような美しい女性である。

蕭乾は語り続ける。

当時，上海がこれほど混乱しているとは想像もしなかった。46年春，彼女が上海に着くと，私たちは取りあえず旅館を宿にしたが，夜中になると，南京虫に悩まされた。英国で中産階級の家庭に育ち，一言も中国語のしゃべれない彼女には，中国に来て南京虫に刺されるなんて，生まれて初めてのことだったので，泣き喚き散らすしかなかったのだった。私は彼女を連れて，3ヶ月間に5回も引っ越した。…途中略…。それでも，彼女は「ここは私の住む国じゃないわ！　私は英国に帰りたい」と言いつづけた。

1946年，私は英国から上海に帰ると，半分英国人の血の入った妻謝格温を連れてアンナ（筆者注 ― 米国人で蕭乾の従兄の妻）にあいさつに行った。一歩表門を入ると，当時すでに髪の毛は真っ白になったアンナが1人，庭で

Hosei University Repository

木製のたらいを前にして，しゃがんで洗濯をしていた。私たちを見ると，彼女は急いで体を起し，腰を伸ばし，エプロンで手を拭きながら迎えてくれた。翌年，格温が私と離婚することを決めたとき，私にこう言った，「私は中国という国は，ハスの花が咲き誇り，柳の緑の枝が垂れ，東屋，楼閣建ち並ぶところだと思っていたのに，アンナのあんな姿を見たら，ここは私の父が生まれ育った国に違いないけど，私はこんなところで暮らしたくないと思ったの」と。私は思った，格温が見た現実は，アンナの日常生活の中でも，まだ少しは増しなほうだったのだが。

こんな風に過ごしているうちに，1947年11月，私の風雨に揺らいでいた家庭は，1人の悪人によっていとも簡単に壊されたのだった。彼女は英国に帰った。これは私にとって大きな打撃だった。

彼女は蕭乾と離婚後，生後半年にも満たないわが子を蕭乾の手に残して英国に帰っていった。

筆者が聞くところでは，謝格温が生み，残していった長男蕭馳（幼名鉄柱）は現在，シンガポールで大学の教師をしているということである。彼には家庭はない。傅光明の話によると，謝格温が英国に帰って以後，どうなったかは，蕭乾には終生如何なる情報も入ってこなかったということである。

第6章　蕭乾の3人目の妻梅韜

蕭乾は46年春英国から帰ると48年6月まで，上海の『大公報』で働く傍ら，復旦大学の教授も兼ねていた。2番目の妻謝格温は47年秋，蕭乾との離婚が決まるとすぐ，英国に帰国した。蕭乾の腕の中に，生まれて半年余りの長男鉄柱を残して。

「李輝編」によると，蕭乾と梅韜の結婚は，謝格温との離婚数ヵ月後の48年初春である（筆者注 — 何月かは断定できない）。ということは，彼は謝格温と婚姻中にすでに梅韜と知り合いだった可能性はある。梅韜がどう納得し，どう養育したかは定かではないが，彼女は結婚と同時に母親となり，手のかかる赤ん坊の世話もしなければならなかった。蕭乾は梅韜については，②はもちろん，「生活回想録」（『蕭乾文集』6巻），「一本褪色的相冊」（『蕭乾文集』7巻）にも一切書いていない。筆者が想像するに，上海で，巴金を通して知り合い，結婚し，翌49年8月から北京で暮らしていたようだ。蕭乾は巴金への手紙で，2

Hosei University Repository

人の離婚を伝えている。手紙は52年6月23日に書かれたものである[23]。

巴金兄，あなたはいかがですか。病気はすっかりよくなりましたか。梅韜はあなたがとても痩せて，顔色も悪いと言っていますが，あなたがちゃんとよくなってから，北京にいらっしゃることを希望します。

私と梅（筆者注 — 梅韜とは書いていない）とは，すでに離婚のサインをしましたが，しばらくは一緒に暮らすことにしています。そのほうがなんのもめ事もなく仲良く暮らせて，双方が思いやれますから。赤の他人にはわからないでしょうけど，実際のところ，これは私たちが友だちとしてはベターだけど，夫婦となるとなればベストではないということを証明しているんですよ。

彼女はあなたに「来るとき，私の時計を持ってきてください」と言っています，彼女はこうも言っています，「私の持ち物をあなたのところに送ってしまったので，私もどんな物があったか，はっきりさせることはできないけど，どのみちあなたに役に立つのだったら，あなたが持っていて全部使ってください」と。

手紙の文面から，梅韜は離婚後上海に帰るつもりだったようだ。妻文潔若は『私と蕭乾』の中で，蕭乾が妻梅韜のために赤っ恥をかかされたことを書いている。

彼をもっと怒らせたのは，英国に7年滞在している間に，彼は5冊の本を出版し，2千ポンドの貯金をしていた。しかし1946年英国を離れるとき，英国の為替管理条例により，中国に為替で送ることは許されなかった。そのお金は事実上，46年から英国で凍結されていたのだ。彼は50年冬，新華社がロンドンに支社を創設しようとしていることを聞き，すごく喜んで，社長喬冠華（キョウカンカ）に，英国にある貯金を全額新華社に寄付するので，現地で使って欲しいと申し出た。喬冠華は大喜びで受け取った。だが彼が当時の妻にこれを話すと，彼女は頑として承知せず，むざむざ政府にあげるくらいなら，公定価格に基づいて人民幣に換算し，是が非でも自分にくれるべきだと主張した。このことは彼にかなり気まずい思いをさせた。しかし妻にしつこく言い寄られ，彼は面の皮を分厚くして，約束を翻さざるを得なかった。幸いにも喬冠華は了解してくれ，すぐ額面通り返金してくれたのだった。彼女はお金を手にすると，あっという間に使い果たしてしまった。しかし批判会では，彼女は自分の非を恥じるでもなく，彼を責め，憎々しげに，蕭乾は英国に貯金が

Hosei University Repository

あるのに，遅々として持ち帰ろうとはしなかった，と証言したのだった。批判会に出席した群衆は聞き終わると，蕭乾に対して直ちに憤りを露にした。詩人聞捷（ブンショウ）（1923～71年）はこれをもとに風刺詩を書いた。漫画家にとってもそれは恰好の題材となった。

梅韜は蕭乾と離婚後，1人日本に留学し，神戸で暮らしたということである。帰国後，日本に関する書物を出版したそうであるが，傅光明は筆者に「蕭乾は書物のタイトルを知らないと言っていた」と言ったので，筆者も中国現代文学館で検索してみたが見つからなかった。

《注》

（1）『現代文壇瑰宝』舒乙著（当代中国出版社，1997年11月出版，232頁），『蕭乾散文』傅光明編（中国広播電視出版社，1997年5月出版 「人生旅者：蕭乾」1頁）など多数。
（2）「文字之交」2頁。
（3） 同上4頁
（4） 同上4頁
（5）「楽子和雪子」13頁
（6）「四十年的願望」8頁
（7）「四十年的願望」9頁
（8）『蕭乾文集』7巻（一本色褪的相冊）114頁
（9）『蕭乾 — 漂泊者在路上』李輝著（大象出版社，2001年1月出版，6頁）
（10）『蕭乾選集』第6巻 書信（台湾商務印書館，1993年5月出版，84頁）
（11）『蕭乾 — 漂泊者在路上』李輝著（大象出版社，2001年1月出版，88～89頁）
（12） 1935年12月9日に起きた北京の学生を中心とする抗日救国運動。
（13） 1902年天津で創刊された新聞。後上海に移って発行されたが，また天津にもどり，56年北京に移り，66年終刊した。現在香港で発行されている『大公報』はこのときのものとは別の新聞である。
（14） Ⅳ「旅英七載」199頁
（15） 第12章「負笈剣橋」190頁
（16） 79年創刊。人民文学出版社資料編纂部が発行している。最初叢刊として発行されたが，80年以降季刊となる。
（17） 筆者は「蕭乾と冰心」というタイトルで，『季刊中国』2003年夏号に蕭乾と冰心の交流についての文章を発表しているので参照してください。
（18） 第6章 「初次安家」80頁
（19） 1937年7月7日日本軍が北京西南部に架かる盧溝橋を占拠し爆破した事件と8月13日の日本空軍の上海爆撃が全面的な日中戦争へと展開していった。
（20） （19）を参照してください。
（21） 37年抗日戦争が始まると北京大学，精華大学，南開大学の三大学が雲南省昆

Hosei University Repository

明に移り，統合され，西南聯合大学となった。戦後46年再び，それぞれの場所に戻った。

(22) ノルウエーの劇作家イプセン（1828～1906年）が，1866年に書いた喜劇。発表から9年後，作曲家グリークによって音楽が付けられ，初演されて大成功を収めた。物語の主人公はペールはソルベイグという恋人がいながら，結婚式場から幼馴染イングリットを奪って逃げたが，彼女にも飽きて，放浪の旅に出る。放蕩の限りを尽くし，老いて故郷に帰ると，そこには盲目になりながらも，彼の帰りをひたすら待っていたソルベイグがいた。彼女は彼を許し，子守唄を歌ってくれた，その歌を聴きながら，ペールは永遠の眠りに着いた。

(23) 『蕭乾選集』第6巻 書信12頁

（中国現代文学・市ヶ谷教養教育センター兼任講師）